

貴族の眼・武士の眼

—— 覚一本『平家物語』における二つの価値観 ——

沼 波 政 保

はじめに

『平家物語』が語ろうとするものは、「無常」という「ことはり」の前にまったく為す術もなく滅んでいった数限りない人間への、同じ人間としての暖かい同情・共感であり、それは、これまた同じ人間である我々享受者に深い感動を与えるものである。すなわち、『平家物語』は、単に平家一門の衰亡を語るだけのものでももちろんなく、「おごれる人」・「たけき者」であったがゆえに平家は滅びたといった因果応報を語るものでもない。また、「祇園精舎」の段で「無常」という「ことはり」を語り、以下、多くの人々の死（へ至るすがた）を語ることによって、それを実証しただけの、つまり「無常」の「ことはり」を語るだけのものでもない。『平家物語』は、無常の波の大きな流れに対して懸命に抗いながらも結局はその波に呑み込まれてしまった数限りない人間に対して、限り

ないとおしさを感じ、同じ人間として滅び去っていった人間へ贈る鎮魂歌であると言つてよいのではないか。もちろん、語る対象は平家の人々ではある。しかし、そこには、あれほどの権力を握り無常の波など克服できそうにさえ思われた平家の人々でさえも、結局は滅びていった、まして名もなく力もない多くの人間は、言うまでもなく滅び去るしかなかったという、すべての人間に普遍した無常を語っているのである。^①

さて、『平家物語』をこのように捉えた上で、視点を換えてみると、そこには、貴族階級の価値観と武士階級の価値観とをみることが出来る。つまり、この両者が共に存在し、お互いにしのぎあっているすがたをみることが出来るのである。この両者の価値観に基づく判断・評価というもののしのぎあうすがたに貴族の時代から武士の時代へと移っていく転換期を描いた『平家物語』の一つの側面を捉えることができるのではなからうか。

以下、この視点に立つて、今は覚一本を対象を限って、考察していく。

一

『平家物語』は、序章とも言うべき「祇園精舎」の段に続き、「殿上闇討」の段を語る。この段は、忠盛が昇殿を許されたことを妬んだ殿上人たちが、豊明の節会の夜に忠盛を闇討にしようと企てたことについて語る段であるが、企てを事前に知った忠盛は、

われ右筆の身にあらず、武勇の家にもまれて、今不慮の恥にあはむ事、家の為身の為心うかるべし。せむずる

所、身を全して君に仕ふという本文あり。

といって、あらかじめ「用意」をした。つまり、忠盛は、武士たる者が闇討に遭うことを「恥」であると捉え、それは「家の為身の為」に堪えられないことだと考えている。そこには、武士として家門やわが身の名を重んじる武士階級の価値観をみることができる。

一方、用心した忠盛が短刀を帯して昇殿し、郎等を庭に控えさせていたことに對する殿上人たちの対処は、

「夫雄劔を帯して公宴に列し、兵仗を給て宮中を出入するは、みな格式の礼をまもる。綸命よしある先例なり。然を忠盛朝臣、或は相伝の郎従と号して、布衣の兵を殿上の小庭にめしをき、或は腰の刀を横へさいて、節会の座につらなる。兩条希代いまだきかざる狼藉なり。事既に重疊せり、罪科尤のがれがたし。早く御札をけづ（ッ）て、闕官停任ぜらるべき」由、をの／＼訴へ申されければ、

といったものであった。つまり、殿上人たちの忠盛に對する非難は、勅命によつた先例たる「格式の礼」を守らないことに對するものである。ここには、伝統・慣例・慣習というものを重んじ、守り通すべきだとする、貴族階級の価値観をみることができるのである。

これに對して、殿上人たちの訴えを受けた鳥羽上皇の判断は次の如きものであった。

當座の恥辱をのがれむ為に、刀を帯する由あらはすといへども、後日の訴訟を存知して、木刀を帯しける用意のほどこそ神妙なれ。弓箭に携らむ者のはかりことは、尤かうこそあらまほしけれ。兼又郎従小庭に祗候の条、且は武士の郎等の習なり。忠盛が咎にあらず。

「後日の訴訟を存知し」て「木刀を常し」た心遣いを誉めているが、それは「弓箭に携らむ者のはかりこと」としてあるべき行動だというのである。つまり、武士としてあるべき行動として誉めているのである。また、郎等が控えていたことも、「武士の郎等の習」であるとして、とがめていない。すなわち、武士として当然あるべきすがたとして鳥羽上皇は不問に付しているのである。しかし、これは上皇の、武士とはかくあるべきだという考えからの判断であり、武士階級の価値観に基づく判断ではもちろんなく、貴族階級の立場からも武士はそうあるべきだと考えられていたのであって、何等貴族階級の価値観と矛盾しないのである。

以上、この段から二様の価値観をみることができ。すなわち、伝統・慣例・慣習を重んじる貴族階級の価値観、武士として家・名を重んじ、主人への忠誠を重んじる武士階級の価値観である。さらに、鳥羽上皇の言葉からもわかるように、貴族の立場から捉えた武士のあるべきすがたというものもみられるが、これは、貴族が武士をそのように捉えていたのであるから、貴族階級の価値観の範疇に入るものである。

二

この二つの価値観が如実に表われているのは、清盛と重盛を対比して描く段である。まず、巻一「殿下乗合」の段をみる。

清盛はますます横暴を極め、すべてを思いのままに行なっていく。それに対して後白河法皇は、

昔より代々の朝敵をたいらぐる者おほしといへども、いまだ加様の事なし。貞盛・秀郷が将門をうち、頼義が貞任・宗任をほろぼし、義家が武衡・家衡をせめたりしも、勅賞おこなはれし事、受領にはすぎざりき。清盛がかく心のまゝにふるまうこそしかるべからね。是も世末にな（ッ）て王法のつきぬる故なり。

と言われたという。ここで後白河法皇は、過去どのような「勅賞」が行なわれても武士が受領以上になるといふことはなかったということを根拠に、清盛の横暴を非難するのであるが、その根拠は先例であり、先例にはずれることを非難しているのである。つまり、貴族階級の価値観に立っているのである。

そうこうするうちに、資盛と摂政藤原基房との一件が起こる。基房の列に出会っても下馬の礼をとらなかった資盛一行は、駆け破って通ろうとするのであるが、その行動について『平家物語』は、

余りにほこりいさみ、世を世ともせざりけるうへ、めし具したる侍ども、皆廿より内のわか者どもなり。礼儀骨法弁へたる者一人もなし。

と、資盛が祖父清盛の威光を笠に着ておごっていたこととともに、「礼儀骨法」を弁えていなかったからだと言語。ここにも礼儀作法を重んじる貴族階級の価値観がみられる。

駆け破ろうとして逆に基房一行にさんざんな目にあわされた資盛の訴えを聞いた清盛は、

たとひ殿下なりとも、浄海があたりをばはゞかり給べきに、おさなき者に左右なく恥辱をあたへられけるこそ遺恨の次第なれ。かゝる事よりして、人にはあざむかるゝぞ。此事おもひしらせてまつらでは、えこそあるまじけれ。

と怒る。ここには、たとえ摂政であろうとも第一の権力者である自分には遠慮すべきだという、身分・地位ではなく力を第一とする武士階級の価値観がみられる。その価値観に立つからこそ、仕返しをして力を相手に見せつけることが「人にあざむか」れない唯一の方法であると判断するのである。

ところが、このように考える清盛に対して重盛は、

是はすこしもくるしう候まじ。頼政・光基な（シ）ど申源氏どもにあざむかれて候はんは、誠に一門の恥辱でも候べし。重盛が子どもとて候はんずる者の、殿の御出にまいり逢て、のりものよりおり候はぬこそ尾籠に候へ。

と言う。武家の名を重んじる武士的価値観もみられはするが、重盛の言葉の中心は、摂政への礼儀を弁えないことに対する批判であり、貴族階級の価値観に立つものである。

しかし清盛は基房への仕返しをさせる。これに対して『平家物語』は

大織冠・淡海公の御事はあげて申に及ばず、忠仁公・昭宣公より以降、摂政関白のかゝる御目にあはせ給ふ事、いまだ承及ず。

と、過去、摂政や関白がこれほどのひどい目に会ったことは知らないと述べた後、「是こそ平家の悪行のはじめなれ」と語る。つまり『平家物語』は清盛の行動、つまり武士的価値観に立った行動を非難しているのである。換言すれば、この段で『平家物語』は貴族的価値観に立ち、武士的価値観を否定しているのである。このことは、その後重盛が資盛を伊勢へ追いやったことに対して「されば此大将をば、君も臣も御感ありけるとぞきこえし」と語り、

重盛を評価していることからわかるのである。

つまり、この段では『平家物語』作者は貴族階級の価値観に立って語り、武士階級の価値観を否定しているのであるが、重要なのはこの点である。貴族階級の価値観および武士階級の価値観は随所にみることができ、それが『平家物語』においてどう評価されているかが重要である。当時の時代背景から言えば、『平家物語』の中に両方の価値観がみられることは当然であるが、それを『平家物語』作者がどう判断しているか。この点を捉えることによって、『平家物語』の中における両方の価値観がどのような関係にあるか、さらに言えば、『平家物語』はいかなる立場に立って語られているのかということが明らかになるのであり、それが延いては『平家物語』の語ろうとするものをより明らかにする一つの証左となるのであると考えるからである。

三

鹿の谷の陰謀が発覚し、清盛の怒りは頂点に達し、ついに後白河法皇の幽閉を決意する。その理由を清盛が貞能に語る。すなわち、保元の乱の際には「一門半過て新院（崇徳上皇）のみかたへまい」ってしまい、新院の第一皇子重仁親王は父忠盛の側室が乳母だったこともあって、いずれの関係から「新院」を見捨て難かったけれども、「故院（鳥羽上皇）の御遺誠」によって後白河法皇の味方となって先陣をつとめた。また平治の乱の時には、上皇・天皇をともにとり奉って御所に立てこもった信頼・義朝を、身を捨てて追い落とした。かように「君の御為に命を

うしなはんとする事、度々にをよ」んだ。したがって、たとえ人が何と言おうとも、七代までは我々平氏一門をどうして捨てなせることができようか。それなのに成親や西光などの言うことを取りあげなさって平氏一門を滅ぼすなどという法皇の御計画は「遺恨の次第」である。こんなことではこれ以後も讒奏する者があれば、平家追討の院宣を下されるに違いない。朝敵と成ってからはどんなに後悔してもどうしようもない。よって、「世をしづめん程、法皇を鳥羽の北殿へうつし奉るか、然ずは、是へまれ御幸をなしまいらせむと思」う。もう一切、自分は「院がたの奉公おもひき（ッ）」たと語るのである（巻二・「教訓状」）。つまり、今までの後白河法皇への忠義にもかかわらず法皇がそれを認めるどころか逆に平家を滅ぼそうとしたことに対して、清盛は怒り、法皇を幽閉しようとするのである。「御恩」と「奉公」を旨として忠義を尽くそうとする思いを裏切られたこの清盛の怒り、さらには自らの為には上皇であろうとも幽閉をいといわないという、自らの力のみを頼りにし、君臣の分を弁えない、武士階級の価値観に基づくものである。

この父清盛の決意を聞いた重盛は急遽西八条へ駆けつける。一門の者たちが皆鎧に身を固めている中へ、重盛が「烏帽子直衣に、大文の指貫そばと（ッ）」て入っていくと、清盛は重盛のこざかしい態度を諫めようとは思うものの、重盛は「さすが子ながらも、内には五戒をたも（ッ）」て慈悲を先とし、外には五常をみださず、礼儀をたゞしうし給ふ人」なので、衣を纏って鎧を隠そうとする。清盛が法皇幽閉の企てを語ると、重盛は「聞もあへず、はらくと」泣いて、涙を抑えて次のように語る。

此仰承候に、御運ははや末に成りぬと覚候。人の運命の傾かんとては、必悪事を思ひ立候也。又御ありさま、

更にうつゝ共覚え候はず。さすが我朝は辺地粟散の境と申ながら、天照大神の御子孫、国のあるじとして、天兒屋根尊の御末、朝の政をつかさどり給ひしより以来、太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふ事、礼儀を背にあらざや。就中御出家の御身也。夫三世の諸佛、解脱幢相の法衣をぬぎ捨て、忽に甲冑をよろひ、弓箭を帶しましさん事、内には既破戒無慙の罪をまねくのみならずや、外には又仁義礼智信の法にもそむき候なんず。かたゝゝ恐ある申事にて候へ共、心の底に旨趣を残すべきにあらず。まづ世に四恩候。天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩是也。其中に尤おもきは朝恩也。普天の下、王地にあらずといふ事なし。されば彼潁川の水に耳をあらひ、首陽山に薇をお(ッ)し賢人も、勅命そむきがたき礼儀をば存知すところ承はれ。何況哉先祖にもいまだきかざ(ッ)し太政大臣をきはめさせ給ふ。いはゆる重盛が無才愚闇の身をも(ッ)て、蓮府槐門の位に至る。しかのみならず、国郡半過て一門の所領となり、田園悉一家の進止たり。是希代の朝恩にあらずや。今これらの莫大の御恩を忘れて、みだりがはしく法皇を傾け奉らせ給はん事、天照大神・正八幡宮の神慮にも背候なんず。日本は是神国也。神は非礼を享給はず。然ば、君のおぼしめし立ところ、道理なかばなきにあらず。中にも此一門は、朝敵を平げて四海の逆浪をしづむる事は無双の忠なれども、その賞に誇る事は傍若無人共申つべし。……(中略)……君と臣とならぶるに親疎わくかたなし。道理と僻事をならべんに、争か道理につかざるべき。(卷二・「教訓状」)

長い引用になったが、重盛の言葉はすべてが理に叶い、礼儀と人臣の道を説き、貴族階級の価値観に立ったものであることは一目瞭然である。が、少しく検討してみると、まず清盛の企てを即座に「悪事」ときめつけている。

法皇が平家を滅ぼそうと企てたことなどを考慮するまでもなく、いかなる理由があろうとも法皇を幽閉するなど以下の外のことであると考えている。ここには身分を弁え秩序を重んじる考えがみられる。次に「太政大臣の官に至る人の甲冑をよろふ事」は天兒屋根尊以来なかったことであり、それは「礼儀に背」くことであり、「仁義礼智信の法にそむ」くという。ここにも礼儀を重んじ、儒教の教えに忠実であろうとする考えがみられるが、本来武士である清盛がたとえ太政大臣となろうとも甲冑を身に纏うことは何等不思議なことではないのだが、重盛は太政大臣となった清盛を武士とは捉えていない。ここにも貴族階級の価値観に立った重盛の考え方がみてとれるのである。さらに四恩の中でも最も重いのが朝恩であり、本来武門の身にはありえない、清盛や重盛の高官への出世をはじめ一門の繁栄は、朝恩以外の何物でもないのに、これを忘れて法皇を幽閉しようとすることは神慮に背くと語る。そして「道理と僻事をならべんに、争か道理につかざるべき」と結ぶ。人臣の立場を弁え、礼儀を重んじ、道理に立つとうとするこの重盛の考えは、明らかに貴族階級の価値観に基づくものであるといえよう。

このあと法皇への忠と父清盛への孝との間に立つての重盛の苦衷を語る有名な場面があるが、その段「烽火之沙汰」の末尾には

「果報こそめでたうて、大臣の大將に至らめ、容儀躰はい人に勝れ、才智才覚さへ世にこえたるべしや」とぞ、時の人々感じあはれける。……（中略）……上古にも末代にもありがたかりし大臣也。

と語り、重盛をその姿や才知から高く評価している。ここから、法皇幽閉事件を語る『平家物語』作者は貴族階級の価値観に立って語っていることがわかるのである。

四

本曾義仲は卷六「廻文」から登場する。そこではまず幼少時を語ったのに続いて、

やうく長大するまゝに、ちからも世にすぐれてつよく、心もならびなく甲なりけり。「ありがたきつよ弓、

勢兵、馬の上、かちだち、すべて上古の田村・利仁・餘五將軍、致頼・保昌・先祖頼光、義家朝臣といふとも、

争かにはまざるべき」とぞ、人申しける。

と語る。義仲がいかに武士として優れていたかを語るのであるが、それは、剛力で雄々しい心の持主であり、「つよ弓、勢兵、馬の上、かちだち」のすべてに古来の鎮守府將軍や源氏の祖先にも勝っていたというのであり、あくまでも武士として優れていたというのである。すなわち、武士は武勇において評価されており、貴族階級からも武士は当然のように捉えられていたのである。したがってこの記述は、何等貴族階級の価値観に抵触しない。

平家を追い払って都へ入った義仲は、左馬頭となり、越後国を賜り、その上「朝日の將軍」という院宣まで下された（卷八・「名虎」）。しかし卷八・「猫間」の段になると、都の守護にあたった義仲は、「たちの振舞の無骨さ、物いふ詞つゞきのかたくななる」ことこの上もなかったと語る。その理由として、義仲が二歳から三十歳まで「信濃国本曾といふ山里」に居たがためだとし、それに対して「ことほりかな」とは語るものの、そこには、義仲の無骨さや言葉の下品なことに対しての非難めいたニュアンスがある。この評価には、上品な立ち居振る舞いや言葉遣

いを良しとする、貴族階級の価値観に基づいた判断が働いているのである。

この貴族階級の価値観は、続く猫間中納言光高卿との対面の場面にも表われている。義仲は猫間中納言を知らず「猫は人にげんざうするか」と言ったこと、「猫間殿」と言えなくて「猫殿」と言ったこと、何でも新鮮なものを「無塩」と言うことと心得て「ぶゑんのひらたけ」と言ったこと、大きな深い「田舎合子」にご飯を「うづたかく」よそって出したこと、しかもその「合子」は義仲の使う「精進合子」であったこと等が語られ、結果、猫間中納言は「かやうの事に興さめて、のたまひあはすべきことも一言もいださず、聴いそぎ帰られ」てしまったという。猫間中納言が興さめて帰ってしまったと語ることから、この義仲の振る舞いは非難されるべきものだと思えられていることがわかるが、それは貴族階級の価値観によって判断されているからである。

さらに続けて、義仲が官加階した時、直垂で出仕してはいけないうので布衣を着たが、烏帽子の際から指貫の裾まで様になっていなかった。牛車も牛飼いの宗盛のものだったものを使っていたが、出発する際に牛飼いがひとむち当てたところ、車に乗っていた義仲は、

車のうちにてのけにたふれぬ。蝶のはねをひろげたるやうに、左右の袖をひろげて、おきんくんとすれども、なじかはおきらるべき。

という始末だった。また牛飼いとは言えないで、「子牛こでい」と言ったり、車の後ろから降りたりといった、常識さえもわきまえない義仲が語られている。そしてこの段の最後に

其外、おかしきこと共おほかりけれども、おそれて是を申さず。

と語る。

このように、この「猫間」の段では、上落して貴族社会の中に入って、貴族社会の常識への無知さを暴露し、品性のない振る舞いを繰り返す義仲に対して、『平家物語』は冷ややかに語る。そこには、貴族階級の価値観に基づいた評価がなされているのである。

このように、義仲についての描写は、貴族階級の価値観に立ったものである。しかし、また、義仲が上落するまでの平家との数々の戦さについても『平家物語』は語っている。そこには、作者の感情は見出しにくいのが、戦さの描写の詳しさからすると、単に記録的に語っているとは思えない。やはり、戦さを語るところには、武勇や智略に長けた義仲を肯定的に捉えているわけで、そこには武士階級の価値観に立った評価がうかがえると言えるが、巻六「廻文」の冒頭のように、貴族からみた武士のあるべきすがたを語っているとも言え、いずれとも判断しがたい。しかし、義仲ではないが、篠原合戦における斎藤別当実盛は、白髪を染め、錦の直垂に身を包み、死を覚悟して出陣し、討ち死する。その実盛について『平家物語』は

昔の朱買臣は錦の袂を會稽山に翻し、今の斎藤別当は其名を北国の巷にあぐとや。朽もせぬむなしき名のみとゞめをきて、かばねは越路の末の塵となるこそかなしけれ。(巻七・「実盛」)

と語り、武士らしいその最期に同情を寄せている。また、かつて石橋山の戦さで頼朝に逆らった実盛ら東国の五人は平家方についていたが、今回の戦さにあたって、ふらふらすることを潔しとせず、優勢な源氏方につくことなく、あえて劣勢の平家方について死を覚悟して戦さに臨み、すべて討ち死するが、『平家物語』は

さればその約束をたがへじとや、當座にありし者共、一人も残らず北国にて皆死にけるこそむざんなれ。(同・

「篠原合戦」

と、その振る舞いに感じ、同情を寄せている。つまり武士の潔い死に対して同情し、共感しているのである。すなわち、そういった潔さを肯定的に捉えているのであり、貴族も武士はそういうものだとして理解していたとしても、貴族階級の価値観からは同情・共感を生れず、これらは武士階級の価値観に立った描写であると言えよう。とすれば、義仲が上洛するまでの数々の戦さについても肯定的に捉え評価していることは、武士階級の価値観に立った評価であると言えよう。

卷九「木曾最期」は、一代の風雲児の最期を極めて美しく語っている。都の内で乱暴狼藉を尽くしたことを語ったことも忘れたかのように、『平家物語』は義仲の最期を哀愁味たっぷりに描く。その義仲には、もはや「朝日の將軍」のおもかげはない。あれほどの勢いを見せた義仲も、最後は敗れ去っていく。そのすがたを哀調味豊かに描くところには、武勇に生きる武士に運命づけられた最期に対して、深い同情が溢れている。これは武士階級の価値観に基づくものである。それは、前の「河原合戦」の段では「木曾」と呼び捨てられていた義仲が、この段では「木曾殿」と呼ばれていることにも表われている。会話部分を除いて、義仲を指す語が、直前の「河原合戦」の段では全六例中、「木曾」が四例、「木曾殿」が一例、「木曾左馬頭」が一例であるのに対して、「木曾最期」の段では全十四例中、「木曾」が四例、「木曾殿」が九例、「木曾左馬頭」が一例である。ちなみに「猫間」の段では全九例中、「木曾」が八例、「木曾左馬頭」が一例で、「木曾殿」の用例はない^③。この「木曾最期」の段全体にそうした、

武士義仲への同情の思いが流れているのである。それは頂点を極めた人物の哀れな末路への、武士に限らないすべての人間に通ずる思いだとも言えようが、それだけにとどまらず、武力に頼るがゆえに武力が衰えた時にたどらねばならない、武士の、必然的な悲劇性というもののへの同情があるように思われてならない。そしてそれは、生き延びるためにはいろいろな方法を考えることのできる貴族階級の価値観ではなく、潔く死を迎えるしか方法のない武士階級の価値観に立つものであると考えるのである。

この「木曾最期」の段が、そういった武士階級の価値観に基づく語りであることは、この段の細かな部分を見ても理解できる。巴御前について『平家物語』は次のように語る。

中にもともゑはいろしるく髪ながく、容顔まことにすぐれたり。ありがたきつよ弓、せい兵、馬のうへ、かちたち、うち物も（ッ）ては鬼にも神にもあはふといふ一人當千の兵也。究竟のあら馬のり、悪所おとし、いくさといへば、さねよき鎧させ、おほ太刀・つよ弓もたせて、まづ一方の大將にはむけられけり。度々の高名、肩をならぶものなし。

巴御前がいかに男以上のつわものだったかを語り、そのことを讃めたたえている。この巴御前を讃めているところには、武士階級の価値観がみられる。貴族階級の価値観から言えば、このような男勝りの女性は否定されるものである。

このように義仲に関して、上洛するまでの平家との数々の戦さを語るところでは武士階級の価値観から語られているが、「猫間」の段を中心に都での義仲は貴族階級の価値観から批判的に語られている。これは、当然のことな

がら、前者は武士としての義仲であるが、上落してからの義仲は貴族社会の一員として行動しなくてはならなかったからである。しかし最後の「木曾最期」の段では一代の風雲児としての義仲の最期を、武士階級の価値観に立つて哀調味豊かに語っているのである。

五

壇の浦合戦で、平家の運命を悟った平知盛は

新中納言「見るべき程の事は見つ、いまは自害せん」とて、めのと子の伊賀平内左衛門家長をめして、「いかに、約束はたがうまじきか」との給へば、「子細にや及候」と、中納言に鎧二領きせ奉り、我身も鎧二領きて、手をとりにく（ン）で海へぞ入にける。是を見て、侍ども廿餘人をくれたてまつらじと、手に手をとりにくんで、一所にしづみけり。（巻十一・「内侍所都入」）

と入水する。「見るべき程の事は見つ」という死に臨んでの科白は、生を生き切った満足感に満ち溢れ、武勇に優れているとともに平家の運命を悟った沈着冷静な人としての知盛を語って見事とまで言えよう。これを見た侍たち二十余人も「をくれたてまつらじ」と一斉に入水した。これまた、潔い死である。

このように、『平家物語』は多くの死について潔く、また美しく語る。^④

源三位入道は、長絹のよろひ直垂はしながはおどしの鎧也。其日を最後とやおもはれけん、わざと甲はき給は

ず。(巻四・「橋合戦」)

三位入道七十にあま(ッ)ていくさして、弓手のひざ口をゐさせ、いたでなれば、心しづかに自害せんとして、平等院の門の内へひき退いて……(中略)……三位入道は、渡邊長七唱「を」めして、「わが頸うて」との給ひければ、主のいけくびうたん事のかなしさに、涙をはらはらとながいて、「仕ともおぼえ候はず。御自害候はば、其後こそ給はり候はめ」と申しければ、「まことに」とて、西にむかひ、高声に十念となへ、最後の詞ぞあはれなる。

埋木の花さく事もなかりしに身のなるはてぞかなしかりける

これを最後の詞にて、太刀のさきを腹につきたて、うつぶさまにつらぬか(ッ)てぞうせられける。其時に歌よむべうはなかりしかども、わかうよりあながちにすいたる道なれば、最後の時もわすれ給はず。(巻四・「宮御最期」)

源三位入道頼政は、「其日を最後とやおもはれけん、わざと甲はき給はず」と「死」を覚悟しての出陣であり、「心しづかに自害せん」「西にむかひ、高声に十念となへ」て辞世の歌を詠んで果てた。武士らしく潔い「死」であるし、往生も予想させる。頼政が武士らしくあったことは、「大将三位入道頼政父子、命をかるんじ、義をおもんじて」(巻七・木曾山門牒状)とも語られている。そして、その「死」について「あはれなる」と語る。この語は直接には、「其時に歌よむべうはなかりしかども、わかうよりあながちにすいたる道なれば、最後の時もわすれ」なかつた詠歌に対してのものであるが、しかし、このように頼政の潔く「死」へ赴いたところへの共感・同情の念

をうかがうことができよう。

重盛の三男清経は、生き永らえることのない運命を悟り、

月の夜心をすまし、舟の屋形に立出でて、やうでうねとり朗詠してあそばれけるが、閑かに経よみ念佛して、

海にぞしづみ給ひける。(巻八・「太宰府落」)

と、潔く「死」に赴く。

妹尾太郎は、それこそ大奮戦の末に討ち死する。武士らしい「死」であるが、これに対して義仲に「あ(ッ)ぱれ剛の者かな。是をこそ一人當千の兵ともいうべけれ。あ(ッ)たら者どもを助て見で」(巻八・「妹尾最期」)と語らせているところに、作者の同情の念が表われている。

河原太郎高直は弟の次郎盛直とただ二人で大勢の平家の軍勢の中へ割って入った。それは平家の人たちをして「東国の武士ほどおそろしかりけるものはなし」(巻九・「二度之懸」)と言わせるほどのことだった。しかし多勢に無勢、やがて討ち死する。覚悟の上の「死」であり、武士らしい「死」である。これに対して、知盛に「あ(ッ)ぱれ。剛の者かな。是をこそ一人當千の兵ともいふべけれ。あ(ッ)たら者どもをたすけてみで」と言わせており、やはり作者の同情の念がうかがえる。

薩摩守忠度は、「いとさはがず、ひかへひかへ落給ふ」(巻九・「忠度最期」)と沈着冷静に落ちて行くうち、平家方の岡邊六野太が近づく。忠度は「是はみかたぞ」と言うが見破られて組みつかれると、「に(ッ)くいやつかな。みかたぞといはばいせよかし」と、無駄な戦いを嫌い、やがて深手を受け、「今はかうとやおもはれけん、『しば

しのけ、十念となへん』とて」六野太を投げ退け、「西にむかひ、高声に十念となへ、『光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨』と唱えて討たれた。そのかたびらには一首の歌が結びつけられていた。血気にはやることなく、風流を忘れることもなく、しかし潔く戦い「死」に赴くそのすがたは、

敵もみかたも是をきいて、「あないとおし、武藝にも歌道にも達者にておはしつる人を、あ（ッ）たら大將軍を」とて、涙をながし袖をぬらさぬはなかりけり。

と語られ、作者の同情・共感の念をうかがうことができる。

敦盛は、熊谷次郎直實に「まさなうも敵にうしろをみさせ給ふものかな。かへさせ給へ」（巻九・「敦盛最期」）と呼びかけられてただ一騎とて返す。組み伏せられて名を問われた敦盛は「名のらずとも頸をと（ッ）て人に問へ。見知らふずるぞ」と語る。直實は見逃そうとするが、敦盛は「たゞとくとく頸をとれ」と言う。味方も近づきやむをえず直實は敦盛を討ちとる。武士らしく潔い「死」である。敦盛を討ちとる際の「あまりにいとおしくて」という直實の心情、錦の袋に入っていた笛をみた直實の「當時のみかたに東国の勢なん万騎あるらめども、いくさの陣へ笛もつ人はよもあらじ。上臈は猶もやさしかりけり」と言う言葉、「九郎御曹司の見参に入たりければ、是を見る人涙をながさずといふ事なし」という記述は、「狂言綺語のことほりといひながら、遂に讀佛乗の因となるこそ哀なれ」という作者の言葉とともに、作者の同情・共感の念をうかがいうる。

佐藤三郎兵衛嗣信は、深手を負い「死」に臨んで義経から「おもひをく事はなきか」と問われ、

なに事をおもひをき候べき。君の御世にわたらせ給はんを見まいらせで、死に候はん事こそ口惜覺候へ。さ

候では、弓矢とる物の、敵の矢にあた（ッ）てしなん事、もとより期する處で候也。就中に「源平の御合戦に、奥州の佐藤三郎兵衛嗣信といひける物、讃岐国八嶋のいそにて、しうの御命にかはりたてま（ッ）てうたれにけり」と、末代の物語に申されん事こそ、弓矢とる身は今生の面目、冥途の思出にて候へ。（巻十一・「嗣信最期」）

と語る。武士らしく潔い「死」である。これに対して、「判官涙をはらはらとながし」とか、「弟の四郎兵衛をはじめとして、是を見る兵ども皆涙をながし、『此君の御ために命をうしなはん事、ま（ッ）たく露塵程もおしからず』とぞ申しける。」といったところに、やはり作者の同情・共感の念を知る。

教経は、うちかかる安芸太郎・次郎を両脇に締め抱えて、『いざうれ、さらばおれら死途の山のともせよ』とて、生年廿六にて海へつ（ッ）とぞ」（巻十一・「能登殿最期」）入った。武士らしく潔い「死」である。

重衡は護送される途中、北の方に会うことを許されたが、別れた後も今一度立ち帰りたくなる心を振り払い、

「願はくは逆縁をも（ッ）て順縁とし、只今の最後の念佛によ（ッ）て九品託生をとぐべし」とて、高声に十念唱へつゝ（巻十一・「重衡被斬」）

斬首された。これに対して作者は、

日來の悪行はさる事なれども、いまのありさまを見たてまつるに、数千人の大衆も守護の武士も、みな涙をぞながしける。

と、同情の念を語っている。

土佐房昌俊は、義経の前に引き出されたが、その神妙な態度に義経は「主君の命をおもんじて、私の命をかるんず」（巻十二・「土佐房被斬」）と感心し、命を助けようと言うが、昌俊は「とくとく頸をめされ候へ」と言つて、斬られる。これに対して作者は、「ほめぬ人こそなかりけれ」と語る。やはり、「死」に対する潔さを讃えている。

平家の侍越中次郎兵衛盛嗣は、頼朝の首をつけねらうが果たさず、捕えられて頼朝の前に引き出される。盛嗣は「是程に運命つきはて候ぬるうへは、とかう申にをよび候はず」（巻十二・「六代被斬」）と答える。それに対して頼朝は「心ざしの程はゆゝしかりけれ」と褒め、助けてやろうと言うが、盛嗣は「勇士二主に仕へず、盛嗣程の者に御心ゆるしし給ひては、かならず御後悔候べし。たゞ御恩にはとくとく頸をめされ候へ」と答え、斬首される。頼朝の言葉や末尾の「ほめぬものこそなかりけれ」と語るところに、その潔さに対する作者の思いが表われている。

以上、作者は、それぞれの「死」を武士らしく潔いものとして語り、しかもそれに対して同情・共感、さらにはその潔さを称揚しようとして語っている。武士の死を潔く、また美しく語るのには、まさにその死が武士にふさわしい死であることを強調しているのであり、武士階級の価値観に立った捉え方であるといえよう。

しかし、武士の死すべてが潔い死ばかりではない。中には迷いやこの世への執着を強く持ちながらも死へ赴かねばならなかった人たちもいる。

三位中将維盛の「死」に臨んでの振る舞いは、その最たるものである。都に残した妻子への想いによって、敵の前にした屋島から脱け出すが、捕えられることを恐れて都の妻子に会うことをあきらめ、熊野へ行く。そこで出家し、那智の沖で入水する。

大きな松の木をけづ（ッ）て、中将名跡をかきつけらる。「……（中略）……『三位中将維盛、法名淨圓、生年廿七歳、寿永三年三月廿八日、那智の奥にて入水す』とかきつけて、又奥へぞこぎいで給ふ。（巻十・「維盛入水」）

ここでは「死」を覚悟している。しかし、「思きりたる道なれども、今はの時になりぬれば、心ぼそうかなしからずといふ事なし。……（中略）……さこそは心ぼそからめ。」と、すぐ迷いが生じている。

「さればこは何事ぞ。猶妄執のつきぬこそ」とおぼしめしかへして、西にむかひ手をあはせ、念佛し給ふ心にも「……（中略）……（都の妻子は、自分が）此世になきものときいて、いかばかりかなげかんずらん」な（ン）と思つゞけられ給へば、念佛をとゞめて、合掌をみだ

す有様である。聖の懸命の勧めで、やっとの思いで、「高声に念佛百返ばかりとなへつゝ、「南無」と唱ふる声とともに、海へぞ入」ったのである。最後は正念にして入水したので往生は予想されるが、その再三の迷いはまさに「死」に臨んだ人間共通の苦しみである。作者は聖に「たかきもいやしきも、恩愛の道はちからおよばぬ事也」と語らせ、同情・共感の情を語ってはいるが、これは武士階級の価値観に立った捉え方ではない。かといって、ならば貴族階級の価値観に立った捉え方かといえ、そうでもない。これはいずれの価値観に立った捉え方でもなく、両者を超えた、人間らしいすがたとして捉えているのであり、その人間らしいすがたに同情・共感しているのである。

平宗盛も、斬首されるにあたって、本性房湛豪の教えに、「しかるべき善知識かなとおぼしめし、忽に妄念ひる

がえて、西にむかひ手をあはせ、高声に念佛し」(卷十一・「大臣殿被斬」)たのであるが、いざ首を落とされようとする時に、「大臣殿念佛をとどめて、『右衛門督もすでにか』と」息子清宗のことを尋ねる。潔く「死」を覚悟しながら瀬戸際で執着を残してしまった。これに対して作者は、「哀なれ」と語り、「たけきものゝふも争でかあはれとおもはざるべき」と語って、同情・共感の念を表わしている。宗盛の子清宗も、斬首の際に父の最後の様子を尋ねるが、この父を思う子の情に対して作者は「いとをかしけれ」と語って、同情しているが、これも前の維盛の死と同様に作者は捉えているのである。

結

貴族階級の価値観と武士階級の価値観はまだ多く指摘することができる。例えば重盛について、前掲の箇所以外にも、徳子御産の時の作法を弁えた沈着冷静な行動に対して「目出たかりしは小松のおとゞのふるまい」(卷三・「公卿揃」)と讃め、その重盛の死に対して「世には良臣をうしなへる事を歎き」(同・「医師問答」)と評している。さらに「凡はこのおとど文章うるはしうして、心に忠を存し、才芸すぐれて、詞に徳を兼給へり」(同上)と語る。このように語られる重盛は、貴族社会における常識・道理をふまえた理想的な人物として描かれているのであり、それは貴族階級の価値観に基づく評価である。また維盛についても「容儀臙拜絵にかくとも筆も及びがたし」(卷五・「富士川」)と貴族階級の価値観から語られるものなど、断片的な箇所も含めば、両者の価値観のみら

れる箇所は枚挙にいとまがない。しかし、もはや紙数は尽きた。

このように、『平家物語』には貴族階級の価値観と武士階級の価値観に基づいて語られる箇所をみることができ。もちろん、『平家物語』も文学作品としての意図・テーマを持っていることは当然であり、それは滅んでいったすべての人間に対する鎮魂歌といったものであった。そうした意図・テーマが蔽としてあることを承知した上で、別の視点からみてみると、二つの価値観をみることができ、そしてこの両者がお互いに絡み合い、文を織り成している。冒頭にこの二つの価値観がお互いに「しのぎあって」と表現したが、まさにそのしのぎあっているところに時代の変換期を描くという『平家物語』の一つの側面を探ることができるのである。

さて、その具体的すがたをみてみると、登場人物は、当然のことながら、大体において、貴族階級の人々は貴族的価値観に立って、武士階級の人々は武士的価値観に立って、それぞれ判断し、行動している。しかし『平家物語』作者は、基本的には貴族階級の価値観に立って語っている。本来武士である平家一門の人々に対しても、その貴族的側面を見た場合には、素直に貴族階級の価値観で判断し、評価している。そして武士らしい判断・行動に対しては、それが同情・共感できない場合には貴族階級の価値観に立って批判し、それが同情・共感できる場合には武士階級の価値観で捉え、評価している。しかも、その同情・共感できる場合のほとんどは死の場面である。しかし、『平家物語』作者の基本的立場は貴族階級の価値観であるが、『平家物語』が死を語る作品であることを考えると、ほとんどが死の場面にみられる武士階級の価値観も決して軽いものではないと言わざるをえない。

この二つの価値観がどのように関わりあっているか、そしてそれが、『平家物語』の語ろうとすることによって貢

献しているかを考えることが、『保元物語』・『平治物語』への同様なアプローチとともに、今後の課題となろう。他日を期したい。

さらに一言しておきたいことは、このような二つの価値観についての考察の結果と『平家物語』の作者もしくはその周辺との関わりについてである。如上の考察の結果から判断するに、『平家物語』作者は貴族階級の人（たち）ではないかということが考えられるが、もちろん軽々に判断できることではない。しかし、『徒然草』をはじめとして、今日まで作者と推定された人々は、ほとんどが貴族階級の人である。もちろん『徒然草』が語るような、武士のことは武士階級の人から伝えられたこともあっただろうが、『平家物語』と貴族階級との繋りの強さを考えずにはおれないのである。もちろん、貴族的価値観に立って判断する人が貴族階級の人であるとは、厳密には言えない。可能性から言えば、武士階級の人と言えども貴族的価値観に立つことはありうる。いずれにしても、このことはさらに多方面から検討すべきことでもあり、今は問題として確認するしかない。

注

① 拙稿『平家物語』の世界―男性群像をめぐって―（『同朋大学論叢』第四七号所収・昭和五十七年十二月）・同『死』への想い―『平家物語』の語るもの―（『同朋大学論叢』第六二号所収・一九九〇年六月）参照。

② 『平家物語』は、覚一本系統の一本である龍谷大学本を底本とする、岩波古典文学大系本をテキストとする。覚一本については、信太周氏が『平家物語』諸本の中では珍しく年代等、素性のはっきりしたもの、以後の諸本研究でも、常にその拠りどころになっている」（『国文学解釈と鑑賞』第四七巻七月号所収「平家物語の原態」・三五頁八一九八二年六月）と述べておられる。

③ ちなみに、主な諸本では次の如くである。

イ 延慶本（北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語 本文篇上・下』勉誠社）

・八（第四）「木曾京都ニテ頑ナル振舞スル事」

一五例中、「木曾義仲」一例、「木曾」一四例。

・九（第五本）「義仲都落ル事 付義仲被討事」

二二例中、「木曾」二〇例、「義仲」一例。

・九（第五末）「兵衛佐ノ軍兵等 付宇治勢田事」

二五例中、「木曾」一〇例、「義仲」一五例。ただし「木曾」に対して「宣ふ」という尊敬語を使用している。

ロ 屋代本（『屋代本平家物語 中巻』桜楓社）

・卷八「木曾義仲於洛中振舞事」

八例すべて「木曾」。

・卷九（「木曾最期」「河原合戦」）欠卷

ハ 源平盛衰記（藝林舎）

・下 卷三十三「光隆卿木曾が許に向ふ 付木曾院参頑なる事」

二〇例中、「木曾」一七例、「義仲」二例、「木曾冠者義仲」一例。

・下 卷三十五「巴関東下向の事」

十四例中、「木曾」二二例、「義仲」一例、「木曾殿」一例。

・同「栗津合戦の事」

二九例中、「義仲」二二例、「木曾」一一例、「木曾義仲」二例、「木曾殿」四例。

④ ①の後者参照。